The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	銀行員・弓場重栄と朝鮮語 ： 日本近代朝鮮語教育史の視点から
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化研究. 2021, 47, p. 3-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79322
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

銀行員・弓場重栄と朝鮮語

―日本近代朝鮮語教育史の視点から―[1)]

植　田　晃　次

은행원 유바 주에이와 한국어

―일본 근대 한국어 교육사 시점에서―

우에다 고오지

본 논문은 “實地應用朝鮮語獨學書” 등 한국어 학습서　2권의 저자로 알려지는 유바 주에이(弓場重榮) 에 관한 연구이다. 유바는 선행연구에서 한국어 전문가라는 평가까지 받은 바 있으나 일본 근대 한국어 교육사 시점에서 살펴본 결과, 기존의 평가와 달리 ‘은행원 견습’ 을 시작으로 후에는 금융계, 실업계 명사로 활동한 인물이었고 한국어 학습서를 엮었기 때문에 한국어 교육사에 그 이름이 남아 버렸다는 것이 밝혀졌다.

キーワード：弓場重栄，『実地応用朝鮮語独学書』，渋沢栄一

1．はじめに

本論文は朝鮮語学習書２冊（と朝鮮語による日本語学習書１冊）を残したことからこれまで「韓国語の専門家」などと評された弓場重栄と朝鮮語について，日本近代朝鮮語教育史の視点から再検討する。具体的には，朝鮮・朝鮮語と関わらない時期を含めたその人物の生涯を通して，時代の中にその人物や著作を位置づけて考察する「人物史主義」，資料に関して影印本やデジタル化されたものを最終的な判断に用いることは極力避け，可能な限り原物を実見した資料に基づいて研究を行う「原物主義」という方法論に基づき[2)]，弓場の人物史と著書等を手掛かりに考察を行う。

先行研究について述べる。まず書誌学の視点から触れたものとして桜井（1974a，1974b，1979）

1）文中の＊は朝鮮語文献であることを示す。また，デジタル化資料にはＤと付す。なお，旧漢字は新漢字で表し，朝鮮語文献は原則として本稿の筆者による日本語訳で示す。

2）原物主義・人物史主義については植田（2012a: 204）参照。近年，「現［ママ］物主義」への批判（吉本 2014）があるが，定義をずらした批判であることは植田（2016b: 1）の指摘の通りである。また，パク＝キヨン（2016: 124）は，書誌学的考察に重点を置いたものでない場合，「［…］マイクロフィッシュを利用した研究が重大な欠点となりはしないだろう。」と述べている。しかし，この種の主張は考古学者が土器の写真やレプリカのみで研究することを是とするようなものである。本論文の筆者がとりわけ原物主義に立つのは，杜撰な影印や解題（植田 2010，2013a）に依ることは論外として，研究倫理上の問題点（植田 2017b: 1）にも鑑みるためである。

がある[3)]。次に原物主義・人物史主義に基づき，弓場の著した学習書が国外での朝鮮語教材の底本の一冊として「流用」（現在の視点では盗用・剽窃）されたことを明らかにした植田（2012b）がある。また，近年，デジタル化資料や影印本の隆盛に伴い，主としてこれらを手軽に用いた，1945年以前の朝鮮語学習書を資料とする研究の流行の中で，弓場の学習書を扱った論考も少なくない。例えば，弓場が著者になっている朝鮮語学習書（や日本語学習書）を主に日本語資料として検討した李康民（2008，2011）・齋藤（2013，2015），朝鮮語資料として検討した陳南澤（2016）などがある。また，成玧姸（2009，2014a）・齋藤（2009，2014）・李康民（2015）などでも，近代日本の朝鮮語学習書を扱う中で弓場の学習書に触れたり簡単に紹介したりしている[4)]。また，黄雲（2015）は近代朝鮮の日本語教育を検討する中で弓場の日本語学習書も取り上げている。しかし，これらで弓場の人物史はおおむね『実地応用朝鮮語独学書』の緒言をもとにした記述や桜井（1974a，1974b，1979）などの引用にとどまる。さらにこれらが資料として依拠する学習書には，基本的に日本の国立国会図書館（以下，国会図書館）蔵など限られた特定のデジタル化資料が用いられており，異本の書誌は明らかになっていない[5)]。本論文のように，日本近代朝鮮語教育史の視点から人物史と著作に基づき彼と朝鮮語との関わりを捉えようとするものはない。

本論文では，まず弓場の人物史を明らかにし，彼自身による学習書の書誌を原物主義によって能う限り明らかにするのみならず，学習書以外の文章についても整理した上で，弓場と朝鮮語との関わりを検討する。

その際，同じく「速成科」で朝鮮語を学び，釜山で様々な職を経て生涯を終えた島井浩，朝鮮語学習書とともに日本語学習書も編纂した島井浩・伊藤伊吉・金島苔水（治三郎）などの事例も参照しつつ，国外でその学習書が「流用」された意味合いをも念頭に置いて，弓場と朝鮮語との関わりについて，日本近代朝鮮語教育史の視点から検討する。

2．弓場重栄の人物史

前述の通り，弓場重栄の人物史については，『実地応用朝鮮語独学書』の緒言や桜井（1974a，1974b，1979）の記述に基く場合がほとんどである。ところで，その桜井の記述を見れば，著者の経歴は桜井自らその経歴を調査したものというよりも何らかの種本の記述を骨子としたもので，それに桜井の手による書籍の書誌と前書きなどから得られる情報を加えたものである節が

3）これらは基本的に『実地応用朝鮮語独学書』の序文をもとに，書誌を補ったものである。

4）康仁善（2017: 61–62）は近代の朝鮮語学習書研究では「[…] 3人の論考が目立つ」と述べ，この3人の研究の概要を紹介している。

5）例えば，『実地応用朝鮮語独学書』が28版を重ねていることに触れているものがあるが（李康民 2008: 88，齋藤 2015: 26，陳南澤 2016: 94），単に桜井（1974a: 119，1979: 504–505，526）の記述に依っているものか，実際にその版次の資料の原物にあたって記述したものか判然としない。

ある。たとえば，弓場の経歴について，以下の川端（1913）と桜井（1974a，1974b）を見比べれば，川端（1913）が桜井（1974a，1974b）[6]の種本になったかに見える。桜井が書誌学者であることを考えれば，これはある意味当然のことといえよう。

川端（1913: 227）：「明治六年四月一日生まる小学校を了へ二十年十一月第一銀行見習となり釜山支店勤務を命ぜらる在勤中釜山居留民役場の建設せる韓語速成科に入り朝鮮語を研修す爾来二十二年間同行に在りて仁川平壌京城の各支店出張所誥［ママ］を歴任し四十二年十一月開城出張所主任に栄転す朝鮮銀行の設立せらるゝや之に転じ副司事となり馬山出張所長を命ぜらる大正二年九月本店誥［ママ］を命ぜられ営業局に在勤す倡く新設京城銀行の招聘を受け其の支配人となる」

桜井（1974a: 118–119）：「著者弓場重栄氏は明治二十年渡韓、第一銀行釜山支店に在勤その間釜山語学所速成科に入り朝鮮語を学んだ。その後第一銀行各地の支店、出張所等に勤務し、朝鮮銀行の設立と同時に同銀行に転じ本支店に勤務したが、のち新設の京城銀行の支配人となった。内藤健氏は弓場氏と同時に韓語科に学んだという以外その伝を詳にしない。／［『実地応用朝鮮語独学書』「凡例」の引用略］／本書は相当行なわれたごとく、明治四十五年には二十八版を重ねている。」

桜井（1974b: 110）：「著者弓場重栄氏は明治二十年第一銀行員として釜山支店に勤務した。その傍釜山語学所の韓語速成科で朝鮮語を学び、その後同銀行鮮内［ママ］各地の支店を歴任し、朝鮮銀行、京城銀行の支配人となった。著書は本書のほか内藤健氏と共著になる「実地応用朝鮮語独学書」明治二十九年（明治篇第24参照）がある。／本書は右の内藤氏との共著の単独版の趣を有し、章節のわけ方、編述もほぼ同様である。」

ここではまず，弓場重栄の姓名の読み方を検討する。

CiNii・国会図書館ともOPACでユバ，ジュウエイを採っている[7]。弓場にはユウバ・ユバ・ユミバ・ユンバ・キュウバの読みがあり[8]，名も複数の読み方が可能であろう。齋藤（2015: 23）は根拠を示さず「ゆば　じゅうえい」と断定している。国立国会図書館典拠データ検索・提供サービスで，「弓場，重栄」の読みは「ユバ，ジュウエイ」とされている[9]。さらに同サービスでは，編集履歴として「ユミバ→ユバ（20140313）」，出典として「家族回答（20140313）（読み）」とあ

6）桜井（1979: 504–505，526）の記述も配置や用語の微細な違いなどを除き同様である。

7）2020年9月10日最終確認

8）丹羽・日本ユニパック株式会社（1985: 134），日外アソシエーツ株式会社（2009: 144）。なお，『実地応用朝鮮語独学書』（49頁，東大東文研蔵№6470250348・再版による）では「성은 궁장이요 姓ハ弓塲デス」という例のように，当時の習慣によって，궁장と朝鮮漢字音で示されている。

9）http://id.ndl.go.jp/auth/ndlna/00485349（2020年9月10日最終接続）

ることから，本論文ではこれに従う。しかし，公文書[10]に「ユバシゲハル」というルビが見られることから，名については音読み・訓読みともに用いられていた可能性も含め「シゲハル」という読みの可能性も残る。また，姓は異体字を用いた弓塲という表記も多くも見られるが，本論文では弓場と表記しておく。なお，号は思齊である[11]。

以下，主として川端（1913: 227）を基にしつつその他の資料を補い，さらに詳細な人物史を明らかにする[12]。

弓場重栄は，1873（明治6）年4月1日生まれ[13]，原籍地を東京下谷区とする[14]。小学校を終え，1887（明治20）年11月，14歳で第一銀行見習となり，釜山支店勤務を命じられる。『実地応用朝鮮語独学書』の緒言（1895/ 明治28年3月）に「［…］余等韓地ニ居住スル既ニ八年［…］」とあることから見る限り，渡韓時期はこの年と見られる。在朝日本人数は1880（明治13）年に835人，1890（明治23）年に7245人とされ[15]，開港より10年余の比較的初期の渡航者といえる。なお，第一銀行は1878（明治11）年に釜山，1880（明治13）年に元山，1883（明治16）年に仁川の各支店（出張所）を設けている[16]。

在勤中，釜山居留民役場が建設した「韓語速成科」[17]で朝鮮語を学んだ。同科では国分哲が毎夜3時間ずつ3年間の課程で朝鮮語を教えたという[18]。弓場（や学習書の共著者である内藤）は国分の出身地である対馬の朝鮮語教育[19]の流れを引く教育を受けたと考えて差し支えなかろう。教員から土木会社員・通訳，金融・貸家業者となった『実用韓語学』（1902/ 明治35年）の著者・島井浩も同時期に同科で朝鮮語を学んでいる[20]。

10）「弓場重栄海外旅券下付願の件」（東京都公文書：620.D2.19）の「海外旅券願」

11）『簡易捷径日語独学』D（国会図書館蔵，請求記号: 76-142）。デジタル化資料のため断定できないが，おそらく標題紙とみられる2コマ目の画像および「緒言」による。

12）川端（1913）の記述については注記しない。

13）「弓場重栄海外旅券下付願の件」（東京都公文書：620.D2.19）の「海外旅券御下附願」。ここでは「弓場重知長男」とある。生年月日は川端（1913: 227）・岡（1915: 536）にも一致する。岡（1915）は川端（1913）を参考としたのではないかと見られる。また，「参謀本部ノ依頼ニ依リ在韓邦人中韓語精通者氏名年齢住所等取調一件」（アジア歴史資料センター: B08090017900）でも「明治六年四月生」とある。以下，川端（1913）に一致する岡（1915）の記述は特に注記しない。なお，同時代の似た姓名の人物として，弓場重泰（陸軍砲工学校教授），弓場重光（博文館編輯局員）などの名が見られるが（弓場 1934：広告，坪谷 1937: 25），縁者か否かは確認できていない。

14）川端（1913: 227）では町名・番地も示されているが，「明治24年　アジア　欧米」（東京都公文書：620.A6.06-02）で黒塗りとなっているためここでは略す。

15）木村（2001: 463）

16）第一銀行八十年史編纂室（1957: 414-417）

17）同科は，1888（明治21）年に修齋学校が釜山港共立小学校と改められ，同校校舎を借りて置かれた夜学の附属英語簡易科・韓語速成科のうちの後者である（植田 2013b）。

18）植田（2013b）。『実地応用朝鮮語独習書』の「緒言」にも国分について「当時速成科ノ教員」とある。

19）簡略な文字と発音の説明の後，分野別の単語とそれを含むバラバラな例文を暗記し，それらを組み合わせて会話能力を習得するという形を基礎とした教育システムを指す。赤峰瀬一郎・伊藤伊吉など（植田 2013a，2016b 参照）のように，実地で朝鮮語を身に着けたとみられるケースもあるが，『交隣須知』が「［…］真に朝鮮語研究には唯一無比の良書で今日朝鮮語稽古本として各種刊行されてゐる書物も内容は皆之れが源泉をなしてゐるのだ」（藤波 1925; 1926[2]b: 51）というように，事実上，対馬の教育システムは近代日本の朝鮮語教育の源といえよう。

20）植田（2013b）

1892（明治25）年の段階では釜山浦に在住している[21]。また，1893（明治26）年7月13日（証明年月日）に，渡航先「朝鮮釜山」，渡航主旨「第一国立銀行出店へ出張」，滞留期限「無期」として第一銀行の創設者・頭取の渋沢栄一からの願いに基づき旅券が下付されており，「第一国立銀行員」とある[22]。

入行後，22年間[23]同銀行で仁川・平壌・京城の各支店・出張所詰を歴任する[24]。1906（明治39）年には渋沢が韓国を視察しているが（6/8～7/18），6月17日には平壌から大同江を下り鎮南浦に向かう際に同行した[25]。また，6月30日にも渋沢が「弓場ヲ伴フテ」外出し，李根沢軍部大臣・閔泳綺度支部大臣・権重顕農商工部大臣を訪れ談話した[26]。

その後，1909（明治42）年11月，開城出張所主任に栄転する[27]。なお，開城への転勤時期は，川端（1913: 227）・岡（1915: 536）では11月とされるが，同年2月3日午前10時には第一銀行開城出張所主任の肩書で70余名とともに韓国皇帝の「陛見」を受けており[28]，時期に齟齬がある。

この間，1910（明治43）年10月23日には，渋沢門下の竜門社の第44回秋季総集会兼古稀祝賀会に出席するため東京に赴いたり，1911（明治44）年2月13日開催の青淵先生七十寿祝賀会に賛同・拠金したりするなど[29]銀行員としての活動の延長線上の動きを見せている。

1911（明治44）年には設立された朝鮮銀行に転じて副司事となり，馬山出張所長を命じられ，1913（大正2）年9月に本店詰を命じられ営業局に在勤する。同年，新設された京城銀行の招聘を受け支配人となる[30]。同行への転任に際しては，渋沢から激励の書翰（1914/大正3年1月2日付）が送られている[31]。このように銀行員として出世街道を着々と歩む。

1917（大正6）年4月29日には，満洲視察団（毎日申報主催）の一員として参加した2週間の「南北満洲視察」を終えて京城に帰着し，満鉄の活動に驚嘆する感想を残している[32]。

京城銀行を辞職した時期は判然としないが，「先般辞職した京城銀行支配人弓場重栄氏［…］」

21）弓場（1892）には「在朝鮮釜山浦」と明記されている。

22）「明治24年　アジア　欧米」（東京都公文書：620.A6.06-02），「弓場重栄海外旅券下付願の件」（東京都公文書：620.D2.19）の「海外旅券願」

23）後述の通り，朝鮮銀行に転じたのは1911（明治44）年とされ，勤続年数に2年の齟齬がある。

24）『実地応用朝鮮語独学書』の奥付には一貫して，東京下谷区の住所と「当時朝鮮国［…］在留」（8版では韓国）と書かれている理由は不明である。

25）渋沢青淵記念財団竜門社（1955-1971），25巻67-73頁　本資料の使用にあたっては，「渋沢栄一詳細年譜」（渋沢栄一記念財団ウェブサイト https://www.shibusawa.or.jp/eiichi/kobunchrono.html，2020年9月10日最終接続）も適宜参照した。

26）渋沢青淵記念財団竜門社（1955-1971），25巻，58-67頁

27）高木（1909: 133）でも，1909年当時，第一銀行開城出張所主任であったことが確認できる。

28）「宮廷録事」『皇城新聞』1909.2.9(2)*。この際，塩川一太郎（京畿道書記官），尹致昊も同時に「陛見」されている。

29）渋沢青淵記念財団竜門社（1955-1971），42巻359・362頁，57巻269-291頁

30）岡（1915: 336）にも京城銀行の紹介で支配人として弓場の名がある。

31）渋沢青淵記念財団竜門社（1955-1971），50巻396頁

32）「視察団名簿」『毎日申報』1917.4.15(2)*，「南北満洲視察感想談」『毎日申報』1917.5.1(2)*。この視察団には，尹致昊も副団長として参加している。

という新聞記事[33]の記述から，1917（大正6）年4月にはすでに辞職していたようである。なお，上述の満洲視察団は4月中旬からのものであるが，団員名簿には「京城旭町　会社員　弓場重栄」とあり，京城銀行辞職後に何らかの会社に勤め，その社員の肩書で参加した可能性がある。弓場の後任には，まず4月に京城銀行次席の馬場喜久治が支配人心得として就任し，5月になって元京城居留民団助役の峰尾音三郎が支配人に就任している[34]。いったん支配人心得を置いたという点，「[…]弓場重栄氏辞任後専らその後任を検討中であったが」5月に峰尾の就任が決まり，6月にようやく就任に至ったという点を見るに[35]，弓場の辞職はかなり急なものだったのではないかと思われる。

京城銀行辞職後も，後述のように竜門社の名簿には少なくとも1933（昭和8）年まで特別会員として挙名されており，以下のような関連行事にも参加している[36]。

1920（大正9）年4月18日　竜門社第63回春季総集会（於曖依村荘）に出席

1920（大正9）年11月23日　竜門社第64回秋季総集会，青淵先生八十寿並陞爵祝賀会（於築地精養軒）に出席，同祝賀会に拠金

1922（大正11）年4月16日　竜門社第67回春季総集会兼青淵先生帰朝歓迎会（於曖依村荘）に出席

京城銀行辞職以降，約8年の動静の詳細は不明であるが，1925（大正14）年には東京目黒町上目黒に住み，日本土地建物会社取締役を務めていた[37]。しかし，その後，再び朝鮮に渡り，遅くとも1927（昭和2）年には京城の黄金町や中林洞に住み，朝鮮鉄道会社に勤めていたが，1933（昭和8）年以降は足跡が途絶える[38]。

没年月日・没した場所・墓所をはじめ，その後の消息は不明である

この間，3．で詳述するように，2冊の朝鮮語学習書（『実地応用朝鮮語独学書』・『ポケット朝鮮語独学』）と1冊の日本語学習書（『簡易捷径日語独学 全』）を刊行している。また，4．で見るように学習書以外の文章も残している。参謀本部の依頼による朝鮮語精通者の調査に対する仁川領事館事務代理領事官補有吉明から外務大臣加藤高明宛の公文書（1901/明治34年5月7日付）で最高レベルの「[…]言語自在ニシテ公文書ヲ解シ得ルモノ[…]」として，現住所・原籍府県名・職業・氏名・年齢が「第一銀行内　東京　第一銀行員　弓場重栄　明治六年四月生」と挙げ

33）「京銀支配人就任」『毎日申報』1917.4.14(2)＊

34）「京銀支配人就任」『毎日申報』1917.4.14(2)＊，「京銀支配人決定」『毎日申報』1917.5.22(2)＊

35）「京銀支配人就任」『毎日申報』1917.4.14(2)＊，「京銀支配人決定」『毎日申報』1917.5.22(2)＊，「京城銀行招宴」『毎日申報』1917.6.21(2)＊

36）渋沢青淵記念財団竜門社（1955-1971），33巻334-340頁，43巻10-15，28-39，125-132，206-216頁。なお，1920年11月23日の祝賀会では曖依村荘に文庫を建造することになるが，関東大震災で被災し1925（大正14）年10月25日に渋沢に献呈された。

37）『龍門社会員名簿』龍門社D，1925年（47頁）。同社の詳細については不明である。

38）『龍門社会員名簿』龍門社D，1927年（53頁）・1929年（54頁）・1931年（54頁）・1932年（54頁）・1933年（52頁）。以降，1934～1939年の各年に発行の『龍門社会員名簿』Dには名が見られない。

られていることから[39]その朝鮮語の運用能力が推し量られる。

写真が岡（1915: 536）に残っている[40]。

3．弓場重栄の学習書

2．で触れたように，弓場重栄は確認されている限りで共著を含み朝鮮語学習書を 2 冊，日本語学習書を 1 冊刊行している。

1．で指摘したように，弓場のものを含め朝鮮語学習書を扱う先行研究では，資料として，その多くが韓国で刊行された影印本，あるいはデジタル化資料，とりわけ国会図書館蔵や東京経済大学蔵（桜井義之文庫）[41]を用いている。しかし，影印本やデジタル化資料には問題点が多い[42]。

本章では，原物主義に基づき，弓場が著者となった 3 冊の朝鮮語と日本語の学習書について異本の発行状況を含めた書誌を明らかにした上で，その編纂過程と性格を検討する。

3.1 『実地応用朝鮮語独学書』

弓場重栄・内藤健 合著（編輯）

沈能益（在釜山公立韓語夜学校嘱託教師）校正[43]

確認できた本書の異本の書誌は表 1 の通りである。

表 1 『実地応用朝鮮語独学書』の書誌

初版発行	発行	版次	印刷所	定価	所蔵（資料番号等）[44]
	18960413		株式会社東京築地活版製造所	0.25	一橋大（118095753$）
18960413	18961220	再版	杉原活版所	0.25	東大東文研（6470250348）， 台湾大（0414692）， 大阪市大（00004215612）I
18960413	18980520	3 版	帝国印刷株式会社	0.25	天理大（0578412）I
18960413	19000120	4 版	近藤活版所	0.25	国会（82−181）D
18960413	19001130	5 版	八重洲橋活版所	0.25	個人蔵

39）「参謀本部ノ依頼ニ依リ在韓邦人中韓語精通者氏名年齢住所等取調一件」（アジア歴史資料センターデータベース，B08090017900）

40）2018 年 9 月 3 日，京都大学医学図書館蔵書（200029314383）により確認した。

41）この 2 つはオープンアクセスの資料が多く，お手軽に利用できることがその一因と考えられる。

42）植田（2010: 26，2018a: 96）など参照。例えば，註 11 で述べた不都合の他，後述のように，『実地応用朝鮮語独学書』の 6 版にも 2 種ある。このような点から，デジタル化資料とて「原物」とは言えない。

43）初版では 1 頁冒頭に「在東京 川久保常吉 校」とあり，「沈能益 校正」ではない。また，加藤増雄による題字が他の版の「交隣有道」ではなく「有道交隣」となっている。

44）所蔵欄の I は ILL による複写，D はデジタル化資料により確認したことを表す。その他はすべて原物により確認した。原物主義における ILL の利用については植田（2017a: 17）で述べた。この他，東大（文・国語）に 2 冊（4818607337，4818607345）の所蔵が確認できるが，コロナ禍もあり確認できていない。

初版発行	発行	版次	印刷所	定価	所蔵（資料番号等）
18960413	19010605	6版甲	八重洲橋活版所	0.25	台湾図書館（31111016133934），国学院大（0001827013）I
18960413	19020505	6版乙	八重洲橋活版所	0.25	個人蔵
不記載	19030703	8版	合資会社丸利商会	不記載	堺市立中央（119167468）
不記載	19040800[45]	11版	三秀舎	0.30	個人蔵
不記載	19050507	13版	三秀舎活版所	0.30	長野県立（0101190205）
不記載	19050925	14版	三秀舎活版所	0.30	個人蔵，国立中央（朝40-58）D
不記載	19050927	16版	三秀舎活版所	0.30	九大（068051188004173）I
不記載	19080426	17版	熊田活版所	0.30	ソウル大（10101335353）[46]
不記載	19120526	28版	株式会社東京築地活版製造所	0.35	日文研（003387099）I

発行所は東京[47]の哲学書院であり，印刷所の所在地もすべて東京である。

原物主義による調査に基づき，先行研究も指摘している28版までが確認できたのみならず，6版には2種類のものがあることが明らかになった。奥付を見るに，1901（明治34）年6月5日発行の6版（仮に6版甲と略称）と1902（明治35）年5月5日発行の6版（仮に6版乙と略称）のように，発行日が11ヶ月ずれている。奥付の書誌にも表2の下線部のように異なる部分があるうえ，組版も異なっている。また，標題紙も異なり，6版甲では書名を長方形で囲んだ上で上部に六版とあるが，6版乙では書名が示されているのみである。さらに，表2のように6版甲乙とも4版刊行日が4版奥付（国会図書館蔵D）と異なっている。ただし，4版奥付（同D）で確認する限り，三十三年の1の位の三の3画目が太く不自然に見える。

表2 『実地応用朝鮮語独学書』6版異本の奥付の相違（下線部）

	6版甲	6版乙
4版印刷・発行	明治三十二年十二月三十一日四版印刷発行	明治三十二年十二月卅一日四版印刷発行
5版印刷・発行	明治三十三年十一月三十日五版印刷発行	明治三十三年十一月廿五日五版印刷 明治三十三年十一月三十日五版発行
6版印刷・発行	明治三十四年六月一日六版印刷 明治三十四年六月五日六版発行	明治三十五年五月一日六版印刷 明治三十五年五月五日六版発行
著作者住所	当時朝鮮国仁川港在留	当時朝　国仁川港在留
印刷者	岡村鐘太郎	近藤卯八郎

このような奥付の記載をもとに考えると，6版乙は実は7版である可能性もある。

本書は弓場が14歳で第一銀行に見習として就職して9年後，23歳の頃に銀行員として出世街

45）11版奥付では発行年月のみで日の数字は空白になっている。11版奥付ではまた，「自明治二十九年至三十六年七月第九版刊行」と9版の刊行年月が示されている。

46）原物のバーコードには「101　1335353」とある。

47）8版では住所が書かれていない。

道を歩む中で編纂・刊行されたものである。日清戦争勃発から2年後，終戦から1年余が過ぎたころ世に出たものである。

本書の編纂の経緯は緒言に詳しく述べられており，先行研究でもしばしば言及されている。すなわち，本書は「編スルノ余暇ヲ得」ない速成科の教員・国分哲に代わって「君等幸ニ身閑務ニア」ると勧められ弓場と内藤健が共著として刊行したものである。これに対し，弓場らは「現今韓語学者鮮ナレト雖モ又多少専門家ノアルアリ余等ハ唯速成科ヲ修メタルノミニシテ未ダ及バザル遠ケレバ容易ニ余等ノ為シ能フベキ事ニアラズ若シ妄リニ之ヲナサンカ夫レガ為メ世ヲ誤ルノ恐レアリ須ラク専門家ニ委スルニ如カズ」と答えたという。しかしながら，重ねて勧められたため，「余等大ニ奮起スル所アリ浅学不肖ヲ顧ミズ敢テ」編集したものであると明かしている。編纂に際しては，「[…] 主トシテ先輩ノ著書ニ拠リ又其中ニ余等ノ実地習得シタルモノ等ヲ交ヘテ編シタルモノナリ […]」と述べている。

本書は朝鮮総督府通訳官を務めた藤波義貫が京城で初めて朝鮮語を学び始めた際に用いた学習書として回顧録で挙げている。藤波は『日韓通話』（国分国夫）を入手し，母語話者の「閔先生」について朝鮮語を学び始め，次に出会った学習書として本書を挙げ，次のように回顧している[48]。

> 日韓通話一冊だけを後生大事に信仰して居つても、なんだか御利益が薄い様な気がしてたまらぬ。泥峴の文房具屋を漁つて漸く「実地応用朝鮮語独学書」と云ふ小冊子を手に入れた。諺文に全部片仮名が付けてある。成程独学書たるに背かないが、仮名の有るのは反て危険であり、又為めによくないと思つた。然し第一編諺文解、第二篇基数及数称、第三編単語、第四編会話と云ふ目次で、初学者の為には稍稍組織的に出来てゐる。そして会話第一章には、初対面談話인사허옵시다とあるのが気に入つたから日韓通話と対照して研究の資料とした。

この回顧録からは，本書が1897（明治30年）年末からの3年間，外務省の官費留学生として韓国に渡って朝鮮語を学んだ後[49]，統監府に勤め，総督府通訳官として働いた藤波のような人物でさえ留学初期に学習に用いようとするほどの学習書であったといえる。しかし翻ってみれば，当時，このような立場の人物が用いた学習書としても本書程度のものしかなかったと言い換えることもできる。

本書の共著者である内藤健[50]については，緒言の記述から，「[…] 弓場氏と同時に韓語科に学

48）藤波（1925; 1926²a: 52）

49）藤波（1925: 85）

50）表紙など，健のイがイで表記されている場合もある。

んだという以外その伝を詳にしない。」とされている[51]。また，奥付には「新潟県中頸城郡高城村大字中殿町通町士族／当時朝鮮国[52]釜山浦在留」とある。参謀本部の依頼による朝鮮語精通者の調査に対する釜山領事館領事能勢辰五郎から外務大臣加藤高明宛の公文書（1901/ 明治34年3月26日付）で最高レベルの「公用文書告示等ヲ起艸シ自由ニ対話ヲ為シ得ル者」として，「新潟県中頸城郡高城村士族　内藤健」と挙名されていることから[53]その朝鮮語の運用能力が推し量られる。内藤については，不明な点が多い。ところで，同名異人の可能性も排除できないが，新興林業合資会社（1926/大正15年7月15日設立）の社員として内藤健という名前が見いだせる[54]。これによれば，同社は本店を京城府青葉町1丁目122番地に置き，「一木材売買業、二木材ノ伐採鉄道用枕木各種包装函類ノ製造販売、三造林業及農事開墾、四以上各事業ノ委託経営五営利事業ニ対スル投資、六其他前各項ノ附帯業」を目的とする会社である。住所は京城府漢江通13番地の1，内藤の出資の種類と価格は有限5000円である。『朝鮮銀行会社組合要録』（東亜経済時報社）を見れば，1927（昭和2）年発行では社員に内藤の名が挙げられているが，1929（昭和4）年発行では名前がなくなっている[55]。

3.2 『ポケット朝鮮語独学』

弓場重栄 著（著作者）

校閲は不記載

確認できたものの書誌は次の通りである。

発行所は日韓書房，印刷所は日韓印刷株式会社でともに所在地は京城である。

1915（大正4）年6月4日発行，定価は0.40円である。

版次は初版と見られるこの1種類のみであり，管見の限りでは，重版・重刷されたものは確認できていない。

東京経済大学桜井文庫（0624）に所蔵されており，デジタル化資料が公開されている。なお，この他，個人蔵の原物でも確認した。

3.3 『簡易捷径日語独学　全』

弓場重栄 編纂（発行兼編纂者）

『簡易捷径日語独学　全』Dで確認できたものの書誌は次の通りである。

発行所は弓場重栄（発行兼編纂者），印刷所は株式会社東京築地活版製造所でともに所在地は

51）桜井（1979: 505）

52）8版は韓国

53）「参謀本部ノ依頼ニ依リ在韓邦人中韓語精通者氏名年齢住所等取調一件」（アジア歴史資料センターデータベース，B08090017900）

54）『朝鮮総督府官報』4235（1926年10月2日付）

55）中村（1927: 220，1929: 234–235）

東京である。

1897（明治30）年12月26日発行，定価は0.20円である。

版次は初版と見られるこの1種類のみであり，管見の限りでは，重版・重刷されたものは確認できていない。

国会図書館（76-142）に所蔵されており，デジタル化資料が公開されている。なお，この他，円光大学校中央図書館に弓場重栄編纂の『日語独学』の筆写本（AN004638）があるが，刊行地・刊行処・刊行年とも不明とある。また，忠南大学校図書館にも写記を「丙午（?）十月日」とする筆写本の『日語独学』（482282）があるが，著者・刊写者・刊写地とも未詳とあり同一書かは不明である。ともにOPACの情報であり，現段階では原物の確認に至っていない[56]。

李康民（2011）により，本書は李光洙が日本語を学ぶのに用いた本であることが判明している[57]。その利用法は次の通りである。

> 私は弓場重栄という日本人が作った『日語独学』という本を，日本人も見られず教師もなくそれこそ独学で暗誦をした。その本は日本語と韓語を対照した会話書であり，仮名でも書かれているが，諺文で日本語の発音を書いた本である。一例を挙げて諸位の笑いの種としてみようか。
>
> ［以下例文は略］

また，1905（明治38）年に門司港で「露探ノ疑ヒアル韓人ノ手荷物」が押収された際，『日語独学』1冊が含まれていたが[58]，本書の可能性がある。

管見の限りでは，重版・重刷されたものは確認できていない。しかし，李光洙（1929: 60）で引用された本書の例文とシャントゥ生（1924: 68）とでは日本語・朝鮮語の表記に違いがあり，いずれも国会図書館蔵書に一致しない。また，表記のみならず，引用された6文目と7文目の間に国会図書館蔵書にはある3文が見当たらず，加えて，7文目の朝鮮語訳も異なっていることから，単なる引用時のいい加減さによる可能性もあるが，李光洙が引用したものは重版されたものであった可能性もなくはない。

本書は銀行勤めを約10年続け，『実地応用朝鮮語独学書』を編纂・刊行した約1年8ケ月後，再版が出て1年，5ヶ月後には3版が出ようとしている弓場が，23歳8ヶ月になんなんとする頃に編纂・刊行された。

56）2018年8月28日付で，円光大学校中央図書館運営管理チーム，忠南大学校図書館保存資料室にそれぞれ閲覧可否をメールで照会したが返信を得られなかった。

57）波田野（2015: 16）でも言及がある。下掲のシャントゥ生（1924: 68），李光洙（1929: 60）からの引用参照。なお，執筆者名や表記その他の一部にやや違いはあるが，この2編はほぼ同一のものである。

58）「露探ノ疑ヒアル韓人ノ手荷物差押之件」（アジア歴史資料センターデータベース　B07091181400）

3.4 朝鮮語学習書の編纂過程と性格

まず，弓場の学習書の編纂過程を見る。先行研究は以下のとおり指摘している。

『実地応用朝鮮語独習書』について，李康民（2008: 105）が「[…] その制作過程で既存の韓国語学習書，中でも特に『日韓通話』と『日韓会話』の本文構成を参考として作ったものと思われる。」と結論づけている。また，陳南澤（2016: 95）では，「[…]「第四編 会話」の文には他の学習書と共通する文より独自的な [ママ] 文が多い。」と補足している。

『ポケット朝鮮語独学』について，齋藤（2013: 171）が「[…]『ポケット朝鮮語独学』は […]『実地応用朝鮮語独学書』を基にしながらも，必要に応じて凡例に手を加え，目次及び内容を変更するとともに，「会話」にみられる例文についても状況に応じて例文を削除したり変更したりしていることが明らかになった。」と結論づけている。

なお，日本語学習書の『簡易捷径日語独学 全』の編纂過程については，齋藤（2015: 27）によれば，「いくつかの違いはあるものの、『簡易捷径日語独学』の構成は『実地応用朝鮮語独学書』の内容を簡略化したものであるように思われる」と結論づけているという[59]。

これらの学習書の編纂過程について，先行研究では上述のように「[…] 参考として作った […]」，「[…] 削除したり変更したりしている […]」，「[…] 内容を簡略化したものであるように思われる […]」などとマイルドに表現している。しかし，現代の視点で見れば，他人の著書を「流用」・リメイクしたもの，その前著を使い回したもの，さらにそれを反転して日本語学習書としてリメイクし，使い回したものといえる。ここでいう「参考」というのは，「流用」（現代の視点では盗用・剽窃）であるが，当時はこのような行為がしばしば行われていた[60]。

3.1 で見た『実地応用朝鮮語独学書』の緒言でも「先輩ノ著書」に「実地習得シタルモノ」を加えて編んだことを自ら述べており，少なからぬ朝鮮語学習書と同様にこれらを対比すれば，その「流用」の様子が見出せる。さらに，管見に依れば，1. で述べたように，種本の 1 つである『日韓通話』とともに弓場の学習書も国外ですら，同様に「流用」・リメイクされている[61]。これは3.1で述べた藤波義貫が利用したという事実と併せ見るに，弓場の学習書の使い勝手の良さを示しているともいえよう。

このような行為を現代の視点から批判することはたやすいが，現代と同じ意識を当時の人間は持っていはしなかったという点には注意しておきたい。

次に学習書の性格を見る。

『実地応用朝鮮語独学書』は次のような広告が打たれた商業出版物であった[62]。

59）ここでは齋藤（2013）「弓場重栄編『簡易捷径日語独学』について」（韓国日本言語文化学会 20013[ママ] 年度秋季国際学術大会および招請講演会）からの引用が示されているが，原文未入手のためやむを得ず重引する。

60）田村（2007: 25–26）。また，金島苔水（治三郎）の学習書も激しくリメイク・使い回しが行われている（植田 2014）。

61）植田（2012b）

62）『朝日新聞』1896.4.15(6)・同5.21(6)。また，『京城日報』1915.9.3(3) には『ポケット朝鮮語独学』の広告がある。

本書ハ朝鮮語初学者にハ実に適切の良書なり将来朝鮮に望を属するの士は須らく一本を購読し該国語学に通じ大ハ高麗半島の独立を保護し小ハ我国利を増進せられんことを

また，14版の発行の2日後には16版が発行されているといった点も本書の「実用書・商業出版物としての朝鮮語学習書」[63]という性格を如実に物語っている。

以上で見たように，弓場による朝鮮語学習書の第1弾『実地応用朝鮮語独学書』は「実地応用」，すなわち今風に言えば，現地ですぐ使える生きた朝鮮語が「独学」できるという想像を学習者や購入者に抱かせる魅力的な書名と相俟って，少なくとも16年の間に28版を重ねた。

ところで，28版が刊行されたのは，弓場が第一銀行から朝鮮銀行に転じて副司事となり，馬山出張所長の任にあった頃である。銀行員としての出世街道を歩む中で，弓場自身にとって朝鮮語学習書を重ねて刊行する経済的必要性はなかったと考えられる。むしろ，日清戦争を背景とする時流に乗ってヒットし，日露戦争，韓国併合といった時代の流れの中でのロングセラーのヒット商品というのが実相であろう。商業出版物という観点から見れば，この重版はもはや弓場自身の当初の編纂意図を離れたものであった可能性もある。齋藤（2013: 155，2015：26）は版次を重ねることが「[…] 学習者からの信頼の証 […]」，「[…] 学習者から信頼されていたことを示していると考えられる。」と主張するが，商業出版物という特性を考慮する必要がある。多く売れたからといって信頼性があるとは言えないことは現代の朝鮮語学習書を巡る事情を想起すれば自ずとわかる。

『ポケット朝鮮語独学』は弓場が銀行員としての出世街道を京城銀行支配人という金融機関の重役にまで上った約2年後，42歳の頃に編纂・刊行されたものである。前著と同様に経済的な面からは出版の必然性が感じられず，また，リメイクに際して，発行・編纂の経緯や意図は省かれていることから，商業出版物としての性格がより強いものである。時代の流れの中で売れ筋の商業出版物となった『実地応用朝鮮語独学書』を「流用」・リメイクし，判型の袖珍本化やよりお手軽な書名への変更など商業出版物としての工夫を施した上で，明確に販路を植民地朝鮮に求めて京城の出版社から，あるいは出版社が主体となって発行したものの，時流に乗った商品としての価値を失い，ヒットしなかったものといえよう。また，銀行支配人という肩書から見れば，部下の行員に朝鮮語学習を奨励し，本書を購入させたと考えることもできる。なお，著作者が弓場のみとなった理由には，内藤との連絡が途絶えた，内藤が亡くなった，『実地応用朝鮮語独習書』の編纂過程で弓場の役割が大きかったなどの理由を想像し得るが明らかでない。

63）植田（2014: 69–70）

4．弓場重栄の学習書以外の文章

本章では，弓場が執筆した学習書以外の文章を取り上げる。管見の限りで，以下の2誌掲載の8編が確認された。

1892（明治25）年2月15日　「朝鮮釜山港ノ状況概略」『龍門雑誌』[64]45
1892（明治25）年4月27日　「二十四年中釜山港貿易概況」『同上』47
1892（明治25）年7月15日　「朝鮮釜山浦四、五、六、三ヶ月間商況并金融」『同上』50
1892（明治25）年11月15日　「朝鮮釜山浦七、八、九三ヶ月間ノ商況并金融」『同上』54
1914（大正3）年9月1日　「影響は芳しくは無い」『朝鮮公論』2(9)[65]
1915（大正4）年2月1日　「金融界の現状と吾人の態度」『同上』3(2)
1915（大正4）年3月1日　「男らしく行れ」『同上』3(3)
1917（大正6）年1月1日　「最も安全有利な投資法（此の好景気を如何に利導すべきか）」『同上』5(1)

『龍門雑誌』掲載のものは，内1編に「在朝鮮釜山浦」とあることから，釜山の第一銀行在勤時の19歳の頃に書かれたものと見られる。『朝鮮公論』掲載のものはすべて「京城銀行支配人」という肩書が付記されており，40代初に書かれたものである。

表題からおよそわかるように，金融・経済関係のものばかりである。たとえ文章の舞台は朝鮮であっても朝鮮語は顔を出さず，弓場と朝鮮語との関わりの形跡すら感じ取れない。本業の銀行員・銀行重役の弓場重栄の姿が浮かび上がるのみである。

5．弓場重栄と朝鮮語

本章では，上述の弓場重栄の人物史と著作物に基づき，弓場と朝鮮語の関係を検討する。

李康民（2015: 232）は弓場を「[…]1896年に『実地応用 朝鮮語独学書』を著述した韓国語専門家である。」と位置付けている。他方，齋藤（2015: 26）は弓場を「[…]8年間韓国に住み、釜山語学所速成科で韓国語を学び、実際に韓国語を使って仕事をした人物である[…]」が，「研究者ではなかった[…]」と位置付けている。しかし，「韓国語を使って仕事をした」という根拠は何ら示しておらず，弓場が業務で朝鮮語を用いていたかはわからない。

何を以って「専門家」と見なすかは検討の余地があるが，ひとまず措くことにする。弓場は

64）発行は龍門社

65）発行は朝鮮公論社。本論文では韓日比較文化研究センター編，オークラ情報サービス株式会社発行，2007年（影印）を利用した。弓場自身の文ではないが，1916(大正5）年9月1日　欣々散史「弓場重栄君足を取らる（奇談逸話　其六)」『朝鮮公論』4(9）もある。

2 冊の朝鮮語学習書と 1 冊の朝鮮語で書かれた日本語学習書を残してはいるが，少なくとも島井浩のように朝鮮語を教えたり，奥山仙三のように朝鮮語で禄を食んでいた形跡[66]すら見いだせなかった。弓場自身も，3.1 で見たように自らについて「余等ハ唯速成科ヲ修メタルノミニシテ未ダ及バザル遠ケレバ容易ニ余等ノ為シ能フベキ事ニアラズ若シ妄リニ之ヲナサンカ夫レガ為メ世ヲ誤ルノ恐レアリ須ラク専門家ニ委スルニ如カズ」（『実地応用朝鮮語独学書』「緒言」）と率直に述べている。「緒言」類の特質から，多少の謙遜は割引いて考えたとしても，明らかに朝鮮語を学んだが専門家ではないと冷静に自己評価している。

「[…] 何かにつけて能く聞く所の人々の内より名士として特に人に知られし者僅かに二十余名を抜き」紹介された弓場の略伝である岡（1915: 494，536）には，銀行員・金融界の名士としての弓場が紹介されているのみで朝鮮語を学んだことなぞまったく書かれていない。「夫れ斯の如く氏は殆んど三十年間銀行界に没頭し多年の経験により措置時宜に適し業務の功果常に大に見るべきものあり、氏今適所適材に居る得意の活腕揮ひ意気頗る熾んなり。」というこの略伝のまとめのように，辣腕銀行員・銀行重役の弓場の姿が浮かび上がる。また，川端（1913）のような実業家辞典に取り上げられていることもこれを裏付ける。

さらに，弓場が朝鮮語や日本語の学習書を編纂・刊行した経緯について考える。先述のように，経済的な理由からこのような書籍を編纂・刊行する必要は全くなかったと考えて差し障りはない。弓場がこのような書籍に関わったのは，「速成科」の師である国分哲の「[…] 通商貿易其他ニ於テ将来多望ナル韓語ヲ研究セント欲スルノ士」で「[…] 学校ニ入リテ習学スル｝能ハズシテ徒ニ其志望ヲ空フスル者 […]」のために，「[…] 独学ノ便ヲ与フルノ急務ヲ感ズル […]」（『実地応用朝鮮語独学書』「緒言」）という考えに賛同したためであると考えられる。また，「今乎朝鮮が，あらたに二商港を，開発し，漸々日韓の通商貿易を拡張するに，此時に当りて，日韓両国之人が，各々其語学を，工夫［植田注：勉強の意］せんとする者が多し」[67]（『簡易捷径日語独学』「緒言」）とも記している。ここからは，弓場が「通商貿易」という視点から朝鮮語の必要性を認識していたことがわかる。このように，弓場は朝鮮語を銀行員の立場から開港以降の「通商貿易」の増大[68]という時流に乗ってとらえていたことがわかる[69]。朝鮮語学習書の編著者で，同じく日本語学習書を編纂した人物として，金島苔水（治三郎）（『独修自在日語捷径』，1905/明治38年，青木嵩山堂，広野韓山との共著）・島井浩（『日語会話』発行所不記載，1908/明治41年）・伊藤伊吉（『独学日語教範 全』中里こま（発行者），1912/明治45年）が確認されている。伊藤のようにロシア語・朝鮮語学習書に次ぐ「三匹目のドジョウ」を日本語

66）植田（2013b，2016a）

67）誤植と思われる個所を含め原文は次の通り。下線部はアレアが含まれているが，現行綴字法により示す。「今乎朝鮮이、새로二商港을、開發하여、漸々日韓의通商貿易을、擴張히［ママ］는지라、此時를當한여、日韓兩國之人이、各々其語學을、工夫히［ママ］려하는者가多矣라」

68）『簡易捷径日語独学 全』の漢文の「緒言」では，「韓国新開二港商務之氈劇倍於前日」とも述べている。

69）陳南澤（2016: 97）では『実地応用朝鮮語独学書』には開化期の商業関連用語が多く現れることを弓場が銀行員であったこととも関わると推測しているが，人物史と併せ見れば，当然の帰結なのである。

学習書で狙った節のあるものもある[70]。

さらに，学習書の書誌の様相を見るに次のことがわかる。

まず，奥付の版権表示で「版権所有」（3・13・14・16・17版），「著作権登録済」（4・5・6版甲・6版乙・11版）のほかに，「版権所有　本書奥附ニ著者及ヒ発行者ノ検印ナキモノハ偽版ナリ」（初・再・28版）や「版権所有　本書奥付ニ著者及発行者ノ検印ナキモノハ偽版ナリ」（8版）のように「偽版」について注記された版がある。植田（2014）で検討した紙型の譲渡などに見られる当時の商業出版物と印刷・出版業界の状況を合わせ見れば，弓場の学習書についても「偽版」などの怪しげなものがあったと考えても不思議ではない。また，少なくとも8版から奥付で初版（や当該版次までの）印刷・発行日の記載が省略され簡略化している点や，6版には2種類あり6版乙の刷りがかなり悪い点などもこれを示唆している。極言すれば，「偽版」に「偽版」への注意が示されていることすら考えうるのである。これらが「偽版」であるとすれば，もはや弓場・内藤の手を離れた商業出版という舞台で本書が独り歩きしたとみなすこともできる。

また，『ポケット朝鮮語独学』は初版のみしか確認できないが，前述のように，『実地応用朝鮮語独学書』のヒットを受け，時流に乗って二匹目のドジョウを狙って内容にも手を入れたうえで，商業出版物としての工夫を施してヒットを狙った，あるいは銀行の部下への朝鮮語学習奨励による需要を当て込んだものの，不発に終わったとみることもできる。題字や緒言が省略されているのも，商業出版物の特性から不要と見なした編集者の判断ではないかと思われる。また，齋藤（2013: 170）では「［…］弓場重栄が『ポケット朝鮮語独学』を作成する際［…］『実地応用朝鮮語独学書』の間違いを正したり、現代日本語の表記により近いものに訂正し」たというように，この改訂が弓場自身によって行われたことを自明視しているが，奥付に「著作者」ともあることから，『実地応用朝鮮語独学書』の「偽版」存在の疑い同様に，もはや弓場の手を離れ，編集者によって改訂された可能性すら考える必要もあるだろう。

弓場重栄は朝鮮語を学び，銀行員の視点から朝鮮語や日本語の学習書を編纂・刊行したが，「人生を切り開く着脱可能なアイテムとしての朝鮮語」[71]を早々と脱ぎ去り，あくまでも立派な銀行員，銀行重役，金融界・実業界の名士となった人物だったのである。

島井浩が「［…］金島苔水とともに明治後期における代表的な朝鮮語および日本語の普及者として両国の架け橋の役割を果たした人物［…］」[72]などでは決してないのと同様に，弓場重栄も

70）植田（2013a: 26）

71）植田（2017a）

72）成玧姸（2014b: 67）。金島が「些か胡散臭い催眠術家」であったことは植田（2017a: 18）参照。この胡散臭さについては，金島（1903）巻頭の金島と思われる人物の施術中の5枚の写真（時計ヲ凝視シテ半バ催眠状態、催眠中強直ノ状態、催眠中術者ノ命令ニ従フ、催眠中頬部ニ針ヲ刺シテ疼痛ヲ感セズ、催眠中水ヲ甘酒ト誤認シテ飲ム）参照。本論文では同書の原物（個人蔵）に依ったが，1904年1月21日発行のものを増補した第3版（1904/明治37年3月15日発行）がKindleで販売されている（2020年9月17日最終確認）。なお，Kindle版では写真「時計ヲ凝視シテ半バ催眠状態」は収録されていない。

「旧朝鮮語学」[73]を担ったひとりではあったが「韓国語の専門家」[74]ではなかったのである。

6．おわりに

朝鮮語教育史やその周辺分野では，主に『実地応用朝鮮語学習書』を内藤健とともに編んだ人物として，弓場の名が現代に残っている。著しくは韓国語の専門家という評価すらある。

しかし，本論文で明らかにした人物史が示すように，弓場の本職は銀行員であり，会社員・会社役員，金融界の名士としての人生で出世街道を歩んだ。その間，『龍門雑誌』・『朝鮮公論』に金融・経済関係の文を寄せていることや，そもそも朝鮮語や日本語の学習書を編んだ動機から見てもこのような位置づけに差し障りはなかろう。また，川端（1913）といった実業家辞典に収録されたのみならず，銀行を辞職ののち，日本土地建物会社や朝鮮鉄道会社で働き，少なくとも前者では取締役を務めていたことを示す資料もあることから，実業家という人物像も浮かび上がる。

一方，他人や自身の著書をリメイク・使い回しして2冊の朝鮮学習書と1冊の日本語学習書を編纂したほかは，朝鮮語を教えたり，朝鮮語で禄を食んでいたといった，朝鮮語との関わりを示す形跡は見いだせなかった。

弓場は14歳の頃以降，朝鮮を舞台にその人生の多くを送り，朝鮮語にも通じていたと思われるが，朝鮮語の専門家などではなく，銀行の見習を振り出しに立派な銀行員，銀行重役，金融界・実業界の名士と見なされるようになった人物である。しかし，朝鮮語教育史や近代の朝鮮語学習書を扱う研究で，生涯において朝鮮語との関わりのみを肥大化させることによって，「韓国語の専門家」という虚像が見られることにもなった。近代日本で朝鮮語学習書を刊行した他の多くの人物[75]と同様に，弓場もまた朝鮮語と関わる3冊の学習書を残したがゆえに，朝鮮語教育史に名が残ってしまったのである。

引用文献[76]

植田晃次（2010）「朝鮮語研究会（李完応会長・伊藤韓堂主幹）の活動と民間団体としての性格」『言語文化研究』36，大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2011）「薬師寺知曨」『言語文化研究』37，大阪大学大学院言語文化研究科

73）矢野（2012）

74）李康民（2015: 232）

75）学習書の刊行順に配列すれば，赤峰瀬一郎・松岡馨・島井浩・伊藤伊吉・金島苔水（治三郎）・薬師寺知曨・奥山仙三・笹山章・山本正誠・伊藤韓堂（卯三郎）など枚挙にいとまがない。植田（2010，2011，2012a，2013a，2013b，2014，2016a，2016b，2017a，2018b，2019a，2019b）

76）注1で示した通り，朝鮮語文献には文献末に「＊」を付し，日本語に訳して示した。朝鮮名は朝鮮語の日本語表記の原則が存在しない現状に鑑み，日本語読みにより配列した。

植田晃次（2012a）「明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究」『日本語言文化研究』2（下），延辺大学出版社

植田晃次（2012b）「旧朝鮮語学の国外への影響」第63回朝鮮学会大会口頭発表配布資料

植田晃次（2013a）「伊藤伊吉の経歴と著書」『言語文化研究』39，大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2013b）「島井浩の経歴と著書」第64回朝鮮学会口頭発表配布資料

植田晃次（2014）「金島苔水とその著書」李東哲 他 主編『日本語言文化研究』3（上），延辺大学出版社

植田晃次（2016a）「奥山仙三と朝鮮語」李東哲・権宇・安勇花 主編『日本語言文化研究』4（上），延辺大学出版社

植田晃次（2016b）「出稼ぎ書生・赤峰瀬一郎と朝鮮語」第67回朝鮮学会口頭発表配布資料

植田晃次（2017a）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た山本正誠と朝鮮語」『言語文化研究』43，大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2017b）「近代日本人と着脱可能なアイテムとしての朝鮮語」第68回朝鮮学会口頭発表配布資料

植田晃次（2018a）「中国朝鮮語の規範化方針の転換の軌跡とその可能性」『批判的社会言語学のメッセージ』大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2018b）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た笹山章と朝鮮語」李東哲・安勇花 主編『日本語言文化研究』5（下），延辺大学出版社

植田晃次（2019a）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た伊藤韓堂（卯三郎）と朝鮮語」『言語文化研究』45，大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2019b）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た松岡馨と朝鮮語」第6回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム口頭発表配布資料

岡良助（1915）『京城繁昌記』博文社

金島苔水（治三郎）（1903）『学理実験催眠術』石塚書店

川端源太郎（1913）『朝鮮在住内地人実業家辞典 第一編』朝鮮実業新聞社（芳賀登 他（2001）『日本人物情報大系』72，皓星社）

木村健二（2001）「「朝鮮編」総合解題」芳賀登 他『日本人物情報大系』71，皓星社

黄雲（2015）「韓国開化期における日本語教育に関する研究」麗澤大学博士学位論文

康仁善（2017）「日本語史研究の現状と展望」『日本語学研究』51，韓国日本語学会

齋藤明美（2009）『明治期日本の韓語学習書研究』J＆C*

齋藤明美（2013）「『ポケット朝鮮語独学』と『実地応用朝鮮語独学書』について」『日本語文学』59，韓国日本語文学会

齊藤明美（2014）『明治期の日本における韓語学習書研究』人文社

齋藤明美（2015）「弓場重栄の三つの学習書に見られる日本語について」『日本語学研究』44，韓国日本語学会

桜井義之（1974a）「日本人の朝鮮語学研究（一）」『韓』3(8)，図書文献センター

桜井義之（1974b）「日本人の朝鮮語学研究（二）」『韓』3(12)，図書文献センター

桜井義之（1979）『朝鮮研究文献誌―明治・大正編―』龍溪書舎

渋沢青淵記念財団竜門社（1955-1971）『渋沢栄一伝記資料』渋沢栄一伝記資料刊行会

シャントゥ生（1924）「京城の二十年間の変遷」『開闢』第5年6月号（『開闢＜影印本＞』13，開闢社，1970年）＊　シャントゥはサントゥ（髷の意）

成玧姸（2009）『近代日本語資料としての朝鮮語会話書』東京大学博士学位論文

成玧姸（2014a）『近代朝鮮語会話書に関する研究』J＆C

成玧姸（2014b）「開化期の日本語学習書『独学日語会話』に関する考察」『日本語教育研究』28，韓国日語教育学会

第一銀行八十年史編纂室（1957）『第一銀行史』第一銀行八十年史編纂室

高木久馬太（1909）『朝鮮紳士録』京城新報社（芳賀登 他（2001）『日本人物情報大系』71，皓星社）

田村哲三（2007）『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影』法学書院

陳南澤（2016）「1896年刊『実地応用朝鮮語独学書』の韓国語について」『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』1，岡山大学高等教育開発推進室 他

坪谷善四郎（1937）『博文館五十年史』博文館（佐藤哲彦 解説（2014）『社史で見る日本経済史』77，ゆまに書房）

中村資良（1927）『朝鮮銀行会社組合要録』東亜経済時報社

中村資良（1929）『朝鮮銀行会社組合要録』東亜経済時報社

日外アソシエーツ株式会社（2009）『新訂 同姓異読み人名辞典』日外アソシエーツ株式会社

丹羽基二・日本ユニパック株式会社（1985）『日本姓氏大辞典 表記編』角川書店

パク＝キヨン（2016）「開化期日本刊行韓国語学習書〈独学韓語大成 全〉についての一考察」『ソウル学研究』64，ソウル市立大学校ソウル学研究所＊

波田野節子（2015）『李光洙』中央公論社

藤波義貫（1925）「二、三十年前を顧みて……」『月刊雑誌朝鮮語』1(1)，朝鮮語研究会（本誌は大阪府立中央図書館蔵を使用。以下同様）

藤波義貫（1925; 1926[2]a）「二、三十年前を顧みて【二】」『月刊雑誌朝鮮語』1(2)，朝鮮語研究会

藤波義貫（1925; 1926[2]b）「二、三十年前を顧みて【三】」『月刊雑誌朝鮮語』1(3)，朝鮮語研究会

矢野謙一（2012）「日本における旧朝鮮語学」李東哲・権宇 主編『日本語言文化研究』2（上），

延辺大学出版社
弓場重栄（1892）「朝鮮釜山浦七、八、九三ヶ月間ノ商況并金融」『龍門雑誌』54，龍門社
弓場重泰（1934）『原理解説　物理学史』前野書店（国立国会図書館D）
吉本一（2014）「19世紀末～20世紀半ばの韓国国語教科書および朝鮮語学習書」『日本学』39，東国大学日本学研究所
李光洙（1929）「主人を追って懐かしい二十年前の京城」『別乾坤』18（『別乾坤（第1–73号）』，亦楽，2003年）*
李康民（2008）「1896年刊『実地応用 朝鮮語独学書』について」『日本語文学』39，韓国日本語文学会*
李康民（2011）「春園 李光洙の日本語学習書『日語独学』について」『日本学報』86，韓国日本学会*
李康民（2015）『近代日本の韓国語学習書』亦楽*

付記：本論文は第69回朝鮮学会大会（2018年10月7日）での同題の研究発表の内容に加筆・修正したものであり，JSPS科研費18K00782による成果の一部である。また，それ以前の科研費（17320085・20320081・23520671・26370726）で得た知見も含んでいる。

現在では不適切とされる語句も歴史的経緯から当時の表現を用いた場合がある。

資料閲覧での関係諸機関のご配慮をいただいた。また，一連の科研費による研究の共同研究者・矢野謙一教授（熊本学園大学）から多くの助言を，査読者お二方から有益なコメントを賜り，それを反映させた部分がある。あわせて感謝申し上げます。

追記：脱稿後，「弓場重栄氏通過」（『朝鮮時報』1917. 7. 16（2））を発見した。この記事によれば，1917（大正6）年7月15日，「大阪の某会社」への「栄転」に伴い大阪に赴くため，弓場は家族とともに釜山から連絡船で下関へ向かった。

弓場重栄年譜

日付	年齢	弓場の出来事	社会の出来事
1873 (M6). 4. 1	0	誕生。原籍，東京下谷区	
1876 (M9). 2	2		日朝修好条規，釜山開港
1878 (M11). 3	4		第一銀行釜山支店開設
1880 (M13). 5	7		元山開港，第一銀行元山出張所開設
1883 (M16)	10		仁川開港，第一銀行仁川出張所開設
1887 (M20). 11	14	第一銀行見習，渡韓し釜山支店勤務，韓語速成科で国分哲から朝鮮語を学ぶ	
1892 (M25). 2. 15	18	「朝鮮釜山港ノ状況概略」	
1892 (M25). 4. 27	19	「二十四年中釜山港貿易概況」	
1892 (M25). 7. 15	19	「朝鮮釜山浦四、五、六、三ヶ月間商況并金融」	
1892 (M25). 11. 15	19	「朝鮮釜山浦七、八、九三ヶ月間ノ商況并金融」	
1893 (M26). 7. 13	20	旅券下付	
1894 (M27). 8. 1	21		日清戦争開戦
1896 (M29). 4. 13	23	『実地応用朝鮮語独学書』初版発行	
1896 (M29). 12. 20	23	『実地応用朝鮮語独学書』再版発行	
1897 (M30). 12. 26	24	『簡易捷径日語独学 全』初版発行	
1898 (M31). 5. 20	25	『実地応用朝鮮語独学書』3版発行	
1900 (M33). 1. 20	26	『実地応用朝鮮語独学書』4版発行	
1900 (M33). 11. 30	27	『実地応用朝鮮語独学書』5版発行	
1901 (M34). 5. 7付	28	朝鮮語精通者の調査で「言語自在ニシテ公文書ヲ解シ得ルモノ」とされる。	
1901 (M34). 6. 5	28	『実地応用朝鮮語独学書』6版甲発行	
1902 (M35). 5. 5	29	『実地応用朝鮮語独学書』6版乙発行	
1903 (M36). 7. 3	30	『実地応用朝鮮語独学書』8版発行	
1903 (M36). 7. ?	30	『実地応用朝鮮語独学書』9版発行	
1904 (M37). 2. 10	30		日露戦争開戦
1904 (M37). 8. ?	31	『実地応用朝鮮語独学書』11版発行	
1905 (M38). 5. 7	32	『実地応用朝鮮語独学書』13版発行	
1905 (M38). 9. 25	32	『実地応用朝鮮語独学書』14版発行	
1905 (M38). 9. 27	32	『実地応用朝鮮語独学書』16版発行	
1906 (M39). 6. 8–7. 18	33		渋沢栄一，韓国視察
1906 (M39). 6	33	渋沢の韓国視察に同行（6.17平壌から鎮南浦，6.30渋沢と李根沢・閔泳綺・権重顕の談話に随伴）	
1908 (M41). 4. 26	35	『実地応用朝鮮語独学書』17版発行	
1909 (M42). 2. 3	35	70余名とともに韓国皇帝の謁見	
1909 (M42). 11. ?	36	開城出張所主任に栄転	
1910 (M43). 8. 22	37		韓国併合
1910 (M43). 10. 23	37	東京での竜門社第44回秋季総会兼古稀祝賀会に出席（少なくとも1933（S8）年まで特別会員）	
1911 (M44). 2. 13	37	青淵先生七十寿祝賀会に賛同・拠金	
1911 (M44)	37	朝鮮銀行副司事，馬山出張所長	朝鮮銀行設立
1912 (M45). 5. 26	39	『実地応用朝鮮語独学書』28版発行	

日付	年齢	弓場の出来事	社会の出来事
1913 (T2). 9	40	本店詰，営業局在勤	
1913 (T2)	40	京城銀行支配人に転任	京城銀行設立
1914 (T3). 1. 2	40	渋沢から激励の書翰	
1914 (T3)	41		第1次世界大戦開戦
1914 (T3). 9. 1	41	「影響は芳しくは無い」	
1915 (T4). 2. 1	41	「金融界の現状と吾人の態度」	
1915 (T4). 3. 1	41	「男らしく行れ」	
1915 (T4). 6. 4	42	『ポケット朝鮮語独学』初版発行	
1917 (T6). 1. 1	43	「最も安全有利な投資法（此の好景気を如何に利導すべきか）」	
1917 (T6). 4. 29	44	4月中旬～2週間の満洲視察団（毎日申報主催）より京城に戻る	
1917 (T6). 4. ?	44	京城銀行を辞職し会社員？	
1919 (T8). 3. 1	45		三一独立運動
1920 (T9). 4. 18	47	竜門社第63回春季総集会に出席（東京）	
1920 (T9). 11. 23	47	竜門社第64回秋季総集会，青淵先生八十寿並陞爵祝賀会に出席（東京）・拠金	
1921 (T10)	48		朝鮮語奨励試験開始
1922 (T11). 4. 16	49	竜門社第67回春季総集会兼青淵先生帰朝歓迎会に出席（東京）	
1923 (T12). 9. 1	50		関東大震災
1925 (T14)	52	東京在住，日本土地建物会社取締役	
この間		朝鮮に再渡航	
1927 (S2)	54	京城在住，朝鮮鉄道会社に勤務	
1933 (S8)	60	『龍門社会員名簿』(11. 25発行)に掲載以降，消息不明	